

## 新米病理検査技師の立場から

～取り組みとこれからの課題～

◎山田 健太<sup>1)</sup>  
松阪市民病院<sup>1)</sup>

## 【はじめに】

病理室での1年間を通して病理技師に必要な技術を学び、実践してきた。そのなかで学生時代にやっておくと良いことや、駆け出しの病理検査技師としての課題、今後の目標について報告する。

## 【病院研修での経験】

学部生時の臨地実習のうち病理検査室での実習は5日ほどであり、包埋から薄切、染色までの工程を見学、実施をさせていただいた。

大学院生時の研修では、検体受付から染色までの一連の病理業務を実際に経験させていただいた。細胞診断については模擬スクリーニングまでを行った。

## 【臨床現場での経験】

現在、検体受付から染色までの一連の業務を行っている。1日の流れとして、午前中に検体受付や薄切、染色などを行っている。午後からは、追加の免疫染色や検鏡を行っている。また当院では術中迅速病理診断も多いため、その都度対応している。細胞診断ではファーストスクリーニングを主体として担当し、FNAなど各診療科へ出向くことも多い。

## 【考察】

学部生時とは異なり、大学院生時の研修では約2年間、病理で経験を積むことができ、入職した際にも早くなじむことが出来たと考えられる。また、模擬スクリーニングで豊富な症例に触れることができたことが、細胞検査士取得の決め手となったと感じており、臨床的背景を踏まえて検鏡を行う大切さも学ぶ機会となった。

実際の病理業務では、学生時とは異なり限られた時間の中で、多くの作業を行う必要があり、優先順位を常に念頭におきながら業務を行う大切さを痛感している。また、各診療科に出向く機会も多く、医師をはじめ多職種とのコミュニケーションが大事であると考えている。

## 【まとめ】

学生時に学ぶ知識は病理業務を行う上での土台となるため、知識の定着を図ることが最優先であると考えられる。また、これらの知識をもとに今後は臨床的な関点から考える能力を養うための訓練と経験の必要性を感じており、学会や研修などへの参加や認定資格などの取得も考えていく必要がある。

連絡先：松阪市民病院 病理診断科・病理室 山田健太 0593-23-1515